

神の慰めを告げる牧会的説教を

——現代人の霊的ニーズに応えるために——

堀 肇

はじめに

牧師となって40年を超えたが、殆ど休むことなく毎週、礼拝説教をしてきたから、その数は単純に計算しても2000回以上にはなる。聖書研究・祈禱会など加えるとその数は6000回を超える。その他に神学校や大学の授業、また講演などを加えると、人前で話をしてきた数は相当になる。若い頃は、こんなにも話をする人生を送ることになるとは想像できなかった。

そのような職務の中で、説教は講義・講演と異なる固有の難しさがあり、果たして人の魂を神のリアリティ・いのちに触れさせることが出来たのかどうかという、自分では確かめることができない説教後の得も言われぬ不快感・無力感に今なお耐えなくてはならない生活を送っている。

その大変な生活を若い頃から予感していたのであろうか。説教は一生の奉仕だから、とにかく学ばなくてはと思います、説教・説教集などはよく読んできたし、いまだに45分の完全原稿を書き、説教後は録音テープを聞き直し、果たしてこれで良かったのかと、些か客観性を欠いた説教批評（説教診断）の時を持つようになっている。時々、日曜日の夜、皆が帰った後、独り会堂の会衆席に座って、説教台にセットした録音テープを聞くことがある。

こうした未だ課題の多い“説教生活”の中、今年（2011年）、日本福音主義神学会全国研究会議において講演の機会をいただいたことは、生涯の仕事であ

る説教についても一度振り返る良い機会となった。また何よりも本研究会議の主題でもある説教の普遍的かつ今日的な課題であるコミュニケーションとトランスフォーメーションを実現していくための良い挑戦となったことを感謝したい。筆者に与えられたテーマは、「何を、誰に、どのように語るのか」の内論の「何を」という説教内容に関する部分であるが、この課題について以下論点から考察をしたい。

1. 「神の言葉」を語る前提—説教のための黙想—

説教において「何を語るのか」と問われたならば、それは「良きおとずれ」としての「神の言葉」を語るということである。福音を語るのである。これは余りに自明なことであるだけに、その命題を受け取る説教者自身が、それを語る困難性に気がつかないでいることがあるのではないかと思うほどである。

「神の言葉」を「人間の言葉」を通して語ることであるから、その本質から言って恐ろしく困難な務めなのである。困難というより罪人であり無力な人間である者が果たして「神の言葉」を語れるのだろうか、と問わざるを得ない事柄、それが説教というものである。

カール・バルトやエミール・ブルンナーなど、現代の著名な神学者たちの間において、この神の言葉と人間の言葉との関係を巡って説教の神学に、いや神学そのものに対立があったのは周知のことである。

加えて説教は、単に聖書テキストの釈義や聖書の物語を語るのではなく、その説き明かしを通して、会衆がキリストの現存・いのちに触れるという体験にまで導かなくてはならないという目的があるということ、そこに説教固有の難しさがある。この、言わば福音のリアリティこそが説教の究極的な課題と言ってもよいであろう。

そこで必然的に出て来る大きな課題は、説教者自ら神の言葉を通してキリストに出会い、その言葉にしっかりと耳を傾けなくてはならないということである。そのためには説教者は、あらゆる準備に先だって、説教のための「祈りと黙想」の時を持つことが必要となる。これは神の言葉を人の心と魂の奥に届けるため

の前提条件と言ってよいであろう。これは説教の成否を決定するほどのものと言っても決して過言ではない。

周知のように黙想の歴史は古いものであるが、近年はキリスト教霊性の回復・涵養のために多くの人たちが注目しており、黙想の形式こそ異なれ、ある種のムーヴメントともなっている。ただその種の黙想は、以下に述べる説教準備のための黙想とは目的や方法において当然異なっていると言ってもよい。

とはいえ、説教者なら誰もが何らかの形でやってきているものであるから、新しいことではない。しかし、筆者はこれをつとめて丁寧に、意識的に実行することが説教準備には不可欠な条件ではないかと思っている。

この点について筆者が若い頃、納得したテデキストの一つは、ディートリヒ・ボンヘフファアの『説教と牧会』であった。読み直して見て、やはり名著であると思った。彼は本書の中で説教の準備作業にはまず祈りが必要であることを述べた後、黙想について次のように記している。

祈りに続くのは黙想 (Meditation) である。この言葉を受け入れなさい。われわれによく知られている聖書の部分が、そのまま教会に対する神の言葉にびったり適合することにならない場合がしばしばある。黙想とは既知の知恵を集成することではなく、聖書本文を一語一語自分のものにするのである。それはあらかじめ一つの目的を定めることなしに行われる。

(ローマ教会では、拘束を受けない自由な黙想を、拘束的な、ある目標をおいて黙想するイグナチウス的な黙想と区別して独在論的と呼んでいる)。

マリヤが心にとめて思いめぐらしたように (ルカ 2:19)、「聖書」の言葉を心にとめることが肝要である。言葉は、それが全く新しいものとしてわれわれのところに来る時のように読まれることを求めている。言葉を客観的に距離をおいてではなく、イエスの人格からわれわれにむかって呼びかけたり、したがついてわれわれの心の中で燃え立つ言葉としてわれわれにひびいて来るのである。(キェルケゴールは、聖書を愛の手紙のように読みなさいと言っている)。

これはどれほど強調してもし過ぎることはないと言者は考えている。

2. 説教の源泉—復活の説教

前述したように、説教者は聖書に記された「神の言葉」を「良きおとずれ」として語るのであるが、常に確認しておきたいことは、イエスから宣教の委託を受けた弟子たちの、つまり原始キリスト教会の語った基本的なメッセージが「ほんとうに主はよみがえって……」(ルカ 24:34) というイエスの復活の告知であったということである。私どもの説教の源泉はここにあり、ここから出て、ここに帰るべきなのである。従ってキリスト教の説教において、本稿の主題のように「何を語るのか」と問われたならば、単純に言えば、それはいわゆるキリスト教神学の体系や道徳律を語るのではなく、イエスの復活の証言と言ってよいであろう。もちろん、それは敢えて言うまでもなく、キリスト教神学やキリスト教倫理学の体系を軽視することではない。

ところで、この復活の事実を告知するということは、主の日の礼拝において毎週、復活物語をテキストに「主はよみがえって」と機械的に繰り返し語ればよいということではなく、説教の中心点・土台がそこにあるということなのである。正しく言えば、聖書テキストのどのような箇所から語られようと、説教者はイエスの十字架と復活に現わされた神の無条件の赦しの福音に立脚して語るということなのである。それは復活信仰に生かされて語る、と言い換えてよいであろう。

ただ説教者は、この説教における「復活の中心性」について、もう少し明かな理解をしておきたいという思いがあるのではないだろうか。言わんとすることは分かる。しかし何か実践的な示唆がほしいと思う。この点について、トマス・G・ロング(プリンストン神学校)が『現代神学思想事典』(アリスト一・マクグラス編集)の中に記している説明は理解しやすい。彼はキリスト教の中心真理である復活は、二つの方向に向かうと指摘している。それは聖書の物語全体を語る方向と、その物語を聴衆の現在に合わせる方向があるという。下記の通りである。

正しく黙想する場合には、その黙想された言葉は、その日の中にひとりで行く思い出され、論理的に意識された思索作業なしにわれわれに伴って行くのである¹。

説教のための黙想とは、ボンヘッファーが述べているように「聖書本文を一語一語自分のものにすること」、「それが全く新しいものとしてわれわれのところに来る時のように読まれること」なのである。黙想については、もう少し詳しい説明が必要なのであるが、本稿ではE・H・ピーターソンが『牧会者の神学』で言及している黙想に関する叙述を参考として記すに止めたい。彼は聖書テキストの研究において、解釈学的な注意を十分に払う必要を説いた上で、こう記している。

牧師にとって聖書解釈の課題とは、神の言葉を生きたものとするために奉仕することである。解釈学というものが教会の生命であるものに奉仕し、牧師の召命にふさわしい役割を果たすものであらうとするなら、それは「黙想の解釈学 contemplative exegesis」でなければならぬのである。……黙想による解釈では、言葉を「音」として聞こうとする。言葉は私たちの内なる部分から現れてくる²。

さて、福音を告知する説教には前提条件があることを述べた。それは前述したように、聖書の言葉を「全く新しいものとしてわれわれのところに来る時のように読まれること」であり、「音」として聞かれることである。そのためには、説教で語られるメッセージが、単に知・情・意の意識レベルではなく、つまり魂(霊)の内奥において自分のものとなるためには、聖書テキストを時間をかけて黙想することが必要であると申し上げたい。客観的な真理が、聞き手の実存を揺さぶるほどのものとなるためには、この黙想が必要不可欠なのである。

¹ ディー・トリヒ・ボンヘッファー著、森野善右衛門訳『説教と牧会』新教出版社、44-45頁

² E・H・ピーターソン著、越川弘英訳『牧会者の神学』日本基督教団出版局、140、150頁

第一の方向に進むと、『主は本当に復活した』という宣言は本質的にもっと述べられること、聖書の記述がもっと表現されることを要求する。説教者はイエスを主と名指す方向に向かわなければならず、このイエスが知られるようになった物語を語り、それらを世界との神の関わりの物語の大きな枠の中に位置づける方向に進まなければならない。チャールズ・ワッドが述べているように、「〈イエスが主である〉という告白は物語の中ではじめて意味を持つ。……」(中略) もう一つの方向に向かえば、イエスは主であるという主張は常に発展する福音と聴衆の現在の結び付きを意味する。説教はイエスがあなたがたにとって、世界にとって特別な仕方であることを宣言する。最初の目撃者は、イエスが復活したと知らせただけで終わったのではない。彼らはさらにそこからこの主張を共同体に生きる人々と現在の生活にむすびつけて、イエスが「シモンに現れた」(ルカ 24: 34) こと、「パンを裂く」時弟子たちに知られたこと(同)を述べるのである。

説教は単に聖書の物語の繰り返しではない。それはまたこの物語がどのようにに今近くにある結び付きがあるのかを語る危険な解釈なのである。「そのような解釈が説教の仕事である。説教者は昔の話を繰り返して宣言するのでない。集会の前に示された信仰問題は新鮮であり、新しい解釈を要求している」³。

筆者の理解では、上記の二つの方向性は、統合・調和されるはずのものであると考える。すなわち復活を語るとことは、単に復活物語を語るだけでなく、「常に発展する福音と聴衆の現在の結びつき」、「共同体に生きる人々の現在の生活」の結び付きを語ることなのである。さらにロングは同論文の中で説教は、「キリスト教共同体における多様な必要性に答えるよう準備されな

³ トマス・ロング著、アリストター・E・マクグラス編『説教の神学』(『現代キリスト教神学思想事典』) 新教出版社、357頁

くてはならない⁴と述べ、復活の二つの方向について興味深いイメージで説明している。それは太陽系のイメージである。

復活はキリスト教説教の体系が周囲を回転する太陽系の中心である。この太陽が直接見られなくても、復活はすべての説教に活力を与え、その本当の奇跡を守るようにする⁵。

私どもは常に受難物語や復活物語の説教をするわけではない。その単語や用語を使わない時はいくらでもある。しかし私どもの説教は、十字架と復活に現された神の愛に基礎づけられた信仰に立脚し、復活の光に照らして聖書を解釈し、特に「聴衆の現在の生活」における霊的なニーズに応えるべく神の言葉を語るものでありたいし、そうあるべきである。そこに復活信仰に立った説教者がいるということが大切なのである。

3. 現代における説教—牧会的説教の必要性—

説教において「何を語るのか」という命題の下に、前提となる黙想と説教の源泉・中心点とも言えるべきテーマについて論述してきた。これらは自明な事柄ではあるが、説教の軸足がぶれないために常に再確認しなくてはならないことだと考えたい。

さてこのような論点を明確にしていくとき、前述のロングの「復活の方向性」という指摘からとも言えることであるが、説教における非常に大切なテーマが浮かび上がってくる。それこそ彼の言葉を借りて言えば、それは私どもが説教準備で常に苦しんでもいる「福音と聴衆との結び付き」、「人々の現在の生活との結び付き」なるものである。

このように言くと、それは現代の社会や家庭、また個人が直面している諸問題の解決を聖書に論拠を求めながら、適応的に語っていくことだという主張が

⁴ 上掲書、358頁

⁵ 上掲書、359頁

聞かえてくる。それが「人々の現在の生活との結び付き」だという考え方である。確かに、現実には、現実には語って良い状況と対象というものもあるわけだから、それは間違っていない。

たとえば、親子問題であれば、ガラテヤ人への手紙にあるように、親は「主の教育と訓戒によって育てること」、子は「父と母を敬うこと」、また夫婦問題であれば、夫は「妻を愛すること」、妻は「夫に従うこと」と語ることで問題は解決するはずである。確かに聞き手が真剣に耳を傾け、実践するならば問題は本質的な解決に向かうだろう。

しかし、ここで見落としてならないことは、多くの場合、ここに至るためには、単純ではない、それも時には長い苦しい道のを経て、やっとたどり着くような難しい現実がいくらでもあるということである。その現実に向けて神の言葉を語るには、それこそ「福音と聴衆」が結びつくように神の言葉を語るには、人間の心と魂に対する深い洞察と援助の心が必要なのである。

家族問題を例に取るならば、現代では、家族機能が衰退し、崩壊寸前の家族がどこにでも見られるようになってきた。教会生活を通して、繰り返し正しい教えを聞いてきたクリスチャンであっても、この世の多くの人々が抱えている同じような問題で苦しんでいるのである。

筆者は20数年ほど前から、伝道・牧会の傍ら、聖書の人間観、救済観に基盤を置き、臨床牧会カウンセリングの研究、教育、実践（臨床）に関わっているが、いわゆる熱心な信仰を持っても、不登校、引きこもり、摂食障害、自傷行為、難しい夫婦問題、様々な精神病理のため苦しんでおられる多くの方々において、難しい。また大学のカウンセリング研究所や教団・団体などの牧会事例研究会で奉仕させていただいているが、牧師自身の、また教会に求められる方々の抱えている心と魂を巡る悩みには本当に深刻なものがあることを知った。生死的に関わる実存的な危機の中にある方々もおられる。

それらの方々の多くは、聖書の知識もあり熱心な教会生活また信仰生活をしておられ、外からは悩んでいるようには見えないことがある。牧師の場合ですと、その多くは真面目で熱心な方々である。

さて、筆者がここで何を伝えたいのかと言えば、これが「人々の現在の生活」なのだ、ということである。それは特別な人たちの問題だと思われる方

もあるであろう。確かにこうした問題や病理が外に現れているのは一部といえてよい。しかしこれらの個別的問題は、人間存在の根底において普遍性を持っているものだと考えておきたい。

例えば年間の自殺者が3万人を超えている日本社会の現実、この社会が生き辛く、多くの人々が孤独・孤立（孤族）の中に生きているということなどがある。孤独が蔓延してどうにもなくなっているから、「繋がり」とか「絆」が強調されるようになってきたのではないだろうか。牧会者・説教者はそこを見抜いていなくてはならないと思うのである。

さて、こうした精神世界に置かれている現代人の魂のニーズに応えていくためには、説教は、教育的、倫理的要素を含みながらも、常に牧会的な、あるいは広い意味において臨床的な視点を持っていくなくてはならないと筆者は思っている。伝統的な説明概念で言えば、「魂への配慮」の機能を含む説教ということである。これは可能なことであって、もっとその実践のために力を注ぐ必要があるのではないだろうか。

結論的に言えば、複雑な問題を抱えた人々に対して、すぐカウンセリングを受けるようにと指導しないで、説教によって聞き手が自己洞察や気づきを深めていけるよう導くことは必要ではないかと思う。つまり魂への配慮（ゼール・ゾルゲ）を念頭において牧会的に説教することこそ、今日の教会共同体にとって大きな課題ではないかと思う。この問題について、クリスティアン・メラウが『慰めの共同体・教会』の中で言及している論点は興味深い。

教会員が、説教によってどれほど感銘を受けたかを語ろうとするとき、『それはまさに牧会的な説教でした』という表現になることがあるであろう。それは何を意味するのかを、更に問うならば、『説教がわたしのここに触れた』、『説教が私を慰めた』、あるいは全く単純に『説教は私のこころを建ててくれた』ということになるであろう。

〈牧会的説教〉というのは、……襲いかかってくるような調子のものではないし、教理的・教育的と言わなければならないし、預言的・政治的でもないし、朗々として福音を宣言するということでもない。そうではなくて、むしろ、慰めであり、つましくあり、思いやりがあり、切々たるもので

第二は、他者の苦しみや悲しみを、本人の立場に立って理解できるよう「共感能力」を身につけることである。これは、自分が他者と同じ経験をしなくても、どんなことも自分とは無関係なものではなく、相手の立場になれば、そう感じるだろうと考えることができるようになるということである。

これはいわゆる「感受性訓練」も役立つが、何よりもイエスの心を学ぶことである。あの「放蕩息子」や「良きサマリヤ人」の譬話に登場する「かわいそうに思う」(スプラUNKニゼスサイ)という内蔵が揺り動かされるような憐れみで心が動かされることである。これは共感能力に限界がある私どもにとっては至難の業であるが、キリストに倣いたいと思う。

第三は、第一の自分に向き合うことと、深く関係していることであるが、黙想を深め、魂の内奥において神の愛と慰めを受けることである。余り慣れない言葉であるが「黙想力」といっても良いかもしれない。これは知性・感情・意志・記憶・想像力などの心的機能を動員してみ言葉を讀み、愛の神との親密な交わりを得るための黙想である。前述した説教準備のための黙想とはやや異なり、どこまでも個人の靈的訓練に重点が置かれる黙想である。

黙想には一定の目的を持つものと持たないものがあるが、筆者がここで言う黙想とは、愛と慰めの神のリアリティ・いのちに触れるという目的をもっているものである。説教者が魂の最も深いところで、この愛に触れていることによって説教は観念を乗り越え、死にたいような気持ちを持っているような方々のところにも触れ、慰めを与え、「ところを建て直す」ことのできる牧会的説教となっていくのではないだろうか。

これらを一言で表現するなら、説教者が「何を語るか」を考える場合、その前提として自らが自分に対して(自己対話)、人に対して(共感)、神に対して(黙想)どうあるべきかを「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして」思い巡らし、考察することが必要なのである。換言すれば、自分の心に触れ、人の心に触れ、神の心に触れることなくして、「魂への配慮」の共なった真の牧会的説教は成り立たないのではないだろうか。

あり、人のこのところを建てるものなのである。もともとこのようことを語ってみても、それはまだ、〈牧会的説教〉がどのようなものであるかを、ほんの概括的に語っているにすぎない⁶。

これは、彼が他の箇所で記している言葉で言えば、「牧会的説教とは、パラクレシスを語る」ということなのである。一言でいえば、説教とは、そのプロセスで何が語られようとも究極的には魂が慰められなくてはならないということなのである。まさに『慰めよ。慰めよ。わたしの民を』とあなたがたの神は仰せられる」(イザヤ 40:1)とある通りである。

結論的に言えば、牧会的説教とはイエスの十字架と復活において現された神の愛がところに触れ、それこそ「説教が私を慰めた」、「説教は私のところを建ててくれた」という告白に至らしめるものなのである。現代は多くの人たちが、心にストレスを抱え、人間関係で傷つき、まさに心が立て直されることを望んでいるのである。「魂への配慮」を念頭に置いた牧会的説教は、その立て直しを可能にするのではないだろうか。

おわりに

結論に代え、最後に説教者にとって幾つかの重要な課題について言及して本稿を閉じたい。それは「説教がわたしのところに触れた」、「説教が私を慰めた」という牧会的説教が成立するために説教者に求められる精神的・靈的課題についてである。

第一は、説教者が「自己対話能力」を身につけるということである。自分の光と影の領域にしっかりと向き合い、そのありのままの現実を知ることである。これについてある教会神学者は、「自分自身の存在の中心に入り込み、内なる生の複雑さを熟知すること」だと言っている。この自己洞察なくして、他者の複雑な心を建て直すための牧会的説教は難しい。

⁶ クリスティアン・メラウー著、加藤常昭訳『慰めの共同体・教会』教文館、156頁

〔参考文献〕

- ・リチャード・リシャヤー著、加藤常昭監訳『説教をめぐる知恵の言葉—古代から現代まで』キリスト新聞社、2010年
- ・リチャード・リシャヤー著、平野克巳・宇野元訳『説教の神学—キリストのいのちを伝える』教文館、2004年
- ・ケネス・リーチ著、竹田真監訳・石井智子訳『牧者の務めとスピリチュアリテイ』聖公会出版部、2004年
- ・ヘンリ・J・ナウエン著、西垣二一・岸本和世訳『傷ついた癒し人』日本基督教団出版局、2000年

(日本伝道福音教団鶴瀬恵みキリスト教会牧師・
聖学院大学大学院人間福祉学研究科非常勤講師)